



2021 令和3年 11

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市政策室へ

発行 ● 狛江市政策室
〒201-8585 狛江市和泉本町1-1-5
☎3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp

編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press
〒201-0003 狛江市和泉本町1-35-3
ル・ミリオン・イイダ3階A号
☎3430-6617 FAX3430-6743

アジアの子どもに教育の機会提供

特定非営利活動法人 ESAアジア教育支援の会

2カ国14施設を支援

特定非営利活動法人ESAアジア教育支援の会(内田智子理事長、東和泉1-23-1 ☎5497-2261)は、アジアの貧しい子どもたちが基礎教育や職業訓練を受けられる環境を作るための支援を行っている。ESAはEducation Sponsorship in Asiaの頭文字で、「教育こそがこどもの未来への道」をキャッチフレーズに昭和54年に設立、平成12年に世田谷区喜多見から現在の住所に事務所を移転した。

同会はバングラデシュ人民共和国とインドの2カ国6地域にある学校と孤児院合わせて14施設を支援している。現地のパートナー団体が子どもたちへ学用品や制服の支給、給食の提供を行うほか、教師などの指導者育成、職業訓練などにあたっており、支援を受けて教師になった子もいる。



オンライン授業を受ける子どもたち (写真提供: ESAアジア教育支援の会)

両国でも新型コロナウイルス感染症で大きな影響を受け、昨年3月から今年8月まで休校が続いていた。同会ではこの間、国内の協賛団体などへ呼びかけたり、クラウドファンディングなどで募金を行い、貧困家庭の子に食糧を支援するほか、マスクや石けん、消毒用品、体温計などの衛生用品も配布した。また、生徒の家を訪問して安否確認したり、補習授業をした教師の生活を支えるために教育費を送り、令和2年度は1,837人に支援を実施した。

活動への理解と支援の輪を広げるため、海外の貧困地域の現状を伝える啓発活動を行っており、市内では平成19年から市立藤塚保育園の5歳児を対象に支援している地域の写真などを使った国際理解講座を催している。26年度には市民公益活動事業補助金で、幼児向け教材「みんなちがうけど、しあわせいっしょ」を作り、市内の保育園、幼稚園、小学校に配布、現在も使われている。

現在、全国各地に約450人の個人会員があり、趣旨に賛



スパイスの袋詰めをするボランティア

同する企業などからの寄付金で運営している。教育スポンサーとなる会員の年会費は1口24,000円で、現地で3人の子が1年間学校に通えるという。また、会の活動や運営を支えるサポーター会員制度もある。

「カレスク」で新たな支援

支援の新しい取り組みとして「教育支援『カレスク』」を9月から始めた。毎月1,000円でカレスパイスキットをレシピ付きで届けるサブスクリプションで、その収益で、1人1カ月の教育費と給食費が賄えるという。この取り組みは無理なく社会貢献ができ、おいしいカレーが楽しめる好評だ。会では、スパイスの袋詰めや発送作業を行うボランティアも受け付けている。



▷8<

フェアトレードで海外の女性や子ども支援

NGO チームピースチャレンジャー

女性の自立へ職業訓練

国内協力・国際協力NGOチームピースチャレンジャー(中山寛子代表理事、千葉県市川市本八幡5-11-14)は、世界の子どもの明るい未来のために地球環境を守り、平和で豊かに連帯生きる人間社会実現を目的に、女性の国際的視野を広め、近隣アジア地域の人々との交流を通して地球環境、貧困など国

際社会が抱える課題に取り組んでいる。

「世界の各地域で飢えや紛争に巻き込まれる子どもたちの状況を解決したい」と商社に勤めていた女性3人が平成19年に結成。インドとバングラデシュ人民共和国を視察し、子どもたちが学校に行ける環境にするには女性の経済的自立が必要と考えた。インドのビハール州の村の女性に洋裁や編み物の技術を指導する職業訓練工場を作り、女性や子

給食や刺しゅう販売で生活向上めざす

特定非営利活動法人 日本・バングラデシュ文化交流会

NGOとしてスタート

特定非営利活動法人日本・バングラデシュ文化交流会(松本智子理事長、西野川4-38-36 ☎3430-9352)は、バングラデシュ人民共和国の農村に暮らす人々の生活向上に関する活動を行い、全ての人が健やかに暮らせる地域社会をめざして協力活動・交流活動を行っている。

バングラデシュはサイクロンや洪水など自然災害が多く、その影響を受けやすい農村には貧困家庭が多い。そうした状況を知る同国で青年海外協力隊員として活動した有志が中心となり平成8年にNGOを設立、都内に本部を置き、同国西南部のジョソール県シャジャ郡ナ

バロンに現地事務所を設け、生活改善などの活動を行ってきた。理事長の松本さんも昭和56年に青年海外協力隊員として同国の農村で2年半活動した経験を持つ。

3つのプログラム

会では、多岐にわたっていた活動を見直して、学校給食プログラム、大豆栽培・普及プログラム、刺しゅう製品製作販売プログラムの3本に集約、NGOの事業を引き継ぐかたちで、平成27年に特定非営利活動法人として再スタートした。

現在、会員120人と支援者約200人が全国におり、運営は理事ら6人が担っている。

同会では児童の栄養不足を改善するために、シャジャ

郡の小学校で地元産の大豆を使った学校給食を週5回実施するとともに、地域住民参加で持続可能な学校給食モデルとなるよう行政などに働きかけている。また、伝統的なノクシカタ刺しゅうによって、農作業の合間に女性たちが収入を得られるよう品質向上に取り組み、バングラデシュや日本で販売している。

日本ではノクシカタ刺しゅう作りのワークショップや販売会を行っており、狛江市では平成30年と31年に緑野小学校での国際理解教室に参加、児童にバングラデシュの農村の実情を紹介し、現地の児童との絵画による交流や、日常を紹介したビデオによる交流などを行った。

令和元年の市民まつりにも参加し、刺しゅうなどの



教材を贈る松本さん(写真提供: 日本・バングラデシュ文化交流会)

製品を販売した。事業実施のため理事は年数回現地へ行くが、昨年は新型コロナウイルス感染症のため渡航できなかった。学校給食をしていた小学校は閉鎖され、給食が中断したが、オンラインで連絡を取って情報収集に努め、タンパク質不足になりがちな児童の家庭に大豆ビスケットなどを届ける支援活動を行った。

今後は、バングラデシュでの活動やノクシカタ製品の販売に加え、狛江市をはじめ国内での啓発活動にも力を入れるという。

同会では会員の募集を行っている。

江支部は市内のボランティア宅に設ける予定という。

会全体では理事、スタッフ5人と会員約50人、ボランティア約30人が活動している。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、昨



支援物資を受け取る人たち (写真提供: チームピースチャレンジャー)

年はフェアトレード展などのイベントは開催できず、海外へも行けなかったが、インドなどの現地スタッフと連絡を取り、緊急支援プロジェクトチームを結成しマスクを作ったり、支援物資を集めて送り、貧困世帯の人々が住む村にマスク、消毒薬、石けん、米、小麦粉、豆などを配る

ほか、手洗いなどの衛生教育を行った。

同会では、新型コロナウイルス感染症が落ち着いてきたため国内での活動を再開する予定で、狛江では10日(金)～12日(日)の午前10時～午後5時に泉の森会館でフェアトレード展を開催、通常より安く衣類などを販売する。藤田さんは「現地ではコロナ禍で仕事を失った人も多く、日本で保管している製品を売った収益で現地の人々の生活を支え、学校の運営などの支援活動を行いたい」と話している。

問い合わせ ☎090-5673-9527 藤田さん。